

宮城から、伝えたいこと。

つながれ、どこまでも



# Baton

バトン

VOL.

09

FROM MIYAGI

特集

## 地域の文化を つないでいくこと

きて・みて

【担い手】みやぎ東日本大震災津波伝承館(石巻市)

【伝承施設】震災遺構 仙台市立荒浜小学校(仙台市)  
せんだい3.11メモリアル交流館(仙台市)



テーマ:

## 災害と 文化の継承

あしたのクリエイティブ 東松島市の「サンドアート」

バトンとは

世代や地域を越えて広く「伝える」、リレーのバトンのように「つなげていく」という意味を込めています。  
県内外や幅広い世代の方々が復興・伝承に興味を持ち、被災地へ足を運んでいただくことを目的に発行しています。

# 災害と文化の継承

日本は昔から、災害の多い国です。地震、火山の噴火、水害、台風など、あらゆる自然災害と向き合わざるを得ない環境にあります。しかし、幾多の困難に見舞われながらも、各地には特色ある文化が受け継がれてきました。東日本大震災を機に地域の文化を担った若者たちは、その責任感に向き合いながら、自分なりの喜びを見出し未来に価値をつないでいます。

日本各地に根付く工芸や伝統芸能。その土地の生活と密着し代々受け継がれてきた歴史を伝える文化です。しかし災害によって、行う場所や、材料、道具、技を失ってしまうこともあります。東日本大震災では、主に沿岸部でそのような災害に直面しました。当時は、人々の健康を守ること、地域の復旧・復興を第一に考えなければならぬ状況でしたが、それを進めるうえでも地域の方々の気持ちを励ましたひとつに、地域文化の復活がありました。普段から大事にしてきたもの、自分たちが暮らす地域で受け継がれてきたものを続けられるということが、復興のモチベーションにつながったとさまざまな場所で耳にしました。今回は、震災当時から地域文化を継続させることに関わっている石巻市の雄勝硯職人・徳水辰博さんと、南三陸町の行山流水戸辺鹿子踊のメンバー・佐藤裕さんに、これまでの道のりと今の思いをお聞きしました。

# 地域の文化を

# つなぐ

# 硯職人を志し10年 ものづくりから考える歩む道



当時の状況

## 地元の復旧に向け スレート回収

太平洋に面した石巻市雄勝町。硯の材料となる雄勝石が採れ、室町時代から雄勝硯が作られていたとされます。江戸時代には仙台藩主伊達政宗に硯が献上され、明治から昭和時代には全国の硯の90%を生産していました。

雄勝町で育ち、小学校の授業で硯職人に話を聞いて以来、工芸品に興味を持つようになった徳水辰博さん。震災時はプロダクトデザインを学ぶ富山大学の1年生でした。「体力がなくても役に立てることをと、長期休暇で帰省するたび震災ボランティアとして雄勝石のスレート回収作業

を手伝うようになりました」

泥にまみれたスレートは、東京駅の屋根を復元するための建築資材でした。雄勝石は、時代とともに硯の需要が減り、震災前後には食器としての生産が主軸になっていきます。

徳水さんは、いずれはプロダクトデザインの道に進みたいと思いつつも大学卒業後「雄勝硯を絶やしてはならない」という気持ちもあり雄勝硯生産販売協同組合に就職。製造担当として働き始めました。ただ、その思いと現実には隔たりがありました。

「大量生産していた頃、加工しやすい軟らかい石を使っていた影響で、業界では雄勝石の評価が高くありませんでした。雄勝石の中にも硬く良質な石があるのですが、それが認知されていなかったんです」もどかしさを抱えてはいた

ものの「現状を変えるビジョンや能力もなく、義務感だけで耐えていた」と徳水さんは振り返ります。



復興のきっかけ

## 雄勝石で作られた 美しい硯に出会う

転機となったのは、働いて3年がたった2017年。雄勝を訪れた東京の若手硯職人が作った硯を目にしたときです。平らな硯面に墨をためる小さなくぼみがある中国式の硯。その美しい形と光沢に強く引かれました。

「中国美術の流れをくむ硯でした。自分たちが扱っている雄勝石と同じもので作られているのに、つやの深みが違う、彫りの密度が違う。どうやって作ったのか工法も想像がつ

立てには少し自信があります」。



感じた課題

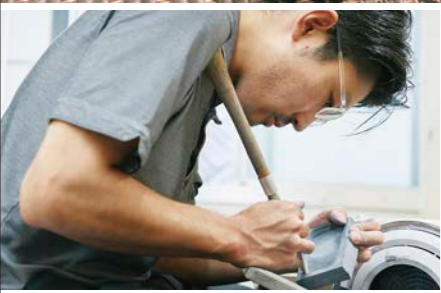
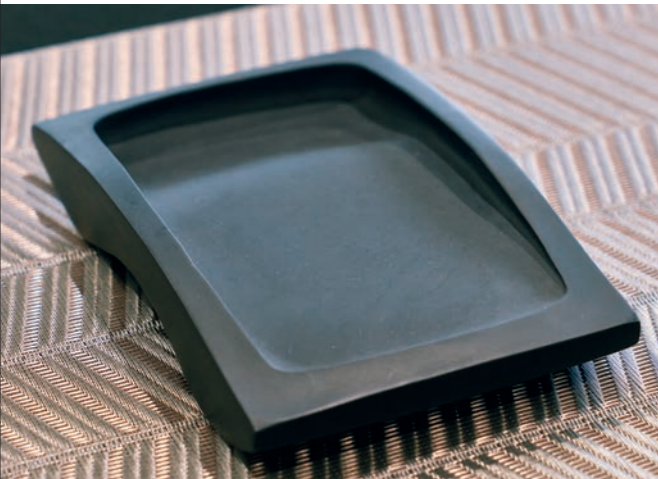
## 圧倒的な実力差が さらなる原動力に

硯を作る技能を自分なりに追求した10年間。若手の職人としてテレビや新聞などで取り上げられ、周囲から注目されるようにもなりました。

「人間的には成熟していないながらも、硯に絞れば評価されるようになったのでは」とも感じていました。

良いと感じる工芸品について価値観を共有できる組合職

## 3.11後の出来事



〈上〉「第4回社のみやこ工芸展」で奨励賞を受賞した徳水さん作「雄勝硯2023」。2024年は、さらに上を目指している。〈左〉硯の大きさに合わせて雄勝石を切り、表面を滑らかにする「砂すり」をした後、「彫り」の作業へ、のみの柄を肩に当て、体全体の力を使って彫っている。

2024年4月、徳水さんは「雄勝工芸工房」を立ち上げます。独立した今思うのは、お世話になった職人の方々のこと。震災後7、8人いた職人は5人ほどに減っています。一人一人名前を挙げて、教わ

## 産地の潜在能力を 伝える一人として



これからの展望

このことが、かえって仕事への姿勢を見つめ直すモチベーションになりました。

員の存在も力になり、さまざまな工芸品に目を向けるようになりました。全国でも知られる、とある作家の展示会に出かけたときです。「作家の方の前に、10年間懸念に話したんです。静かに聞いてくださいましたが、何の反応もありませんでした。そのとき、自分はまるで子どもだと劣等感を感じたんです」若手職人として身分不相応に持ち上げられる一方、気にも留められない存在であることに痛感した瞬間でした。そのことが、かえって仕事への



雄勝石は、雄勝町で採れる黒く硬質な粘板岩（玄昌石）のこと。程よく硬く均質。適度に含まれる硬い鉱物を職人が目立てすることで、墨おりのよい硯に。

# 震災から復活した故郷の誇り 楽しさと共に伝えたい郷土芸能



台湾の台南市総経芸文センターで開催された「和風文化祭」に参加した時のもの。復活以降、地元以外で披露する機会が増え、国内のみならず世界各国へ。(写真提供:行山流水戸辺鹿子躍保存会)

## 復活した郷土芸能 震災で再び危機に

当時の状況

1600年代に始まったとされる南三陸町の郷土芸能、行山流水戸辺鹿子躍。その発祥の地・戸倉水戸辺地区は、東日本大震災の津波で甚大な被害を受けました。戸倉出身で、故郷を離れた現在も水戸辺鹿子躍を踊り続ける佐藤裕さんにお話を伺いました。

「震災発生時、私は戸倉中学二年生、翌日の卒業式の準備中に学校で被災しました。指定避難所の校舎も津波に襲われ、私は校庭脇の山林の斜面を登り助かりましたが、町は流され、多くの人が亡くなりました。行山流水戸辺鹿子躍の衣装や道具も流されました」



復興のきっかけ

## 避難所で育まれた 若い世代の躍り手

自宅が高台にあり津波の被害は避けられたという佐藤さんですが震災で生活は一変。

町は壊滅的な状況で、日常は消えてしまいました。「誰もが諦めていたけれど奇跡的にながれきの中から獅子頭が見つかったそうです。震災から2ヶ月後に避難所の有志によって鹿子躍が復活、多くの人々が元気づけられたと聞いています。私は避難所にはいなかったのですが、鹿子躍復活の時に参加していいのかわからないので私が話していいのかわからないと思います」

佐藤さんが鹿子躍の舞台に立ったのは2011年10月、震災後に授業を受けていた志津川中学校でのことでした。「歌手のエグザイルの皆さんがテレビ番組で慰問に来てくださった時に、郷土芸能を披露しました。私たち世代でも戸倉では鹿子躍を小学五年生から一年間、全員で習います。中学校では選択制で、私は鹿

子躍を続けていました。震災後にステージで躍ったのは、この時が初めてです」

これをきっかけに、仲の良い同級生たちと鹿子躍の稽古を再開、その後は行山流水戸辺鹿子躍保存会の躍り手の一人として地域のイベント等で躍るようになった佐藤さん。「遠くまで通学していて時間を確保するのも大変でしたが、私にとっては大切なひととき。稽古があれば避難所で友達に会えますから。復興のためだけでなく、楽しいからやっている感じ。部活動に近い感覚かもしれません」

2012年には、アメリカ

現在26歳の佐藤さん、同級生も一緒に躍っていますが時

## 続ける大変さより 楽しさが勝る方へ



感じた課題

テキサス州での公演に参加。「人生初の海外でした。会場が広く、太鼓の音が届くかなと心配だったのを覚えています。言葉はわからなくても熱気がすごくて歓声と拍手をいただき嬉しかったです」

折不安を感じています。「躍り手は高校生から30代前後、他と比べるとかなり若いと思います。保存会は60〜80代の『平成の鹿子躍復活』を知る世代。その間の40代・50代はいません。私の上の世代は、学校で習うけれど大人になつたら躍らないのが通例でした。続けていくのは大変です。でも、忙しさを理由に一度やめたら、再開するのは難しいと感じます」

「昭和に見つかった石碑には『生きとし生けるもの全てのものを踊りで供養する』と刻まれていたそうです。供養と復興への祈りを表現できる鹿子躍。依頼があれば躍り、伝えられればと思います」

## 躍り伝え残したい 供養と復興の祈り



これからの展望

佐藤さんは、今年7月末、能登半島地震の復興を願い、石川県にて同級生3人組で鹿子躍を披露しました。「昭和に見つかった石碑には『生きとし生けるもの全てのものを踊りで供養する』と刻まれていたそうです。供養と復興への祈りを表現できる鹿子躍。依頼があれば躍り、伝えられればと思います」

## 行山流水戸辺鹿子躍の歴史

- 1688年～1703年(元禄年間)  
本吉郡水戸辺村の伊藤伴内持遠が鹿子躍を創作
- 1930年代  
太平洋戦争の影響により20年間活動休止
- 1957年  
舞川鹿子躍の活動再開
- 1982年(昭和57年)  
舞川鹿子躍に伝わる巻物より水戸辺村が発祥の地と判明裏付ける享保9年の石碑が水戸辺地区より発見される
- 1991年(平成3年)  
行山流水戸辺鹿子躍保存会が発足
- 1992年(平成4年)  
復活の躍供養を慈眼寺にて奉納
- 2002年(平成14年)  
南三陸町無形文化財指定
- 2011年(平成23年)  
3月 東日本大震災により衣装・道具等が流しがれきの中から獅子頭が発見される  
5月 登米市「葉桜まつり」にて復活の演舞披露
- 2012年(平成24年)  
米国テキサス・レンジャーズ・アーリントン球場などで公演
- 2016年(平成28年)  
第6回三陸海の盆in南三陸にて舞川・水戸辺両地区の行山流水戸辺鹿子躍の共演が実現
- 2017年(平成29年)～2022年(令和5年)  
公演依頼に応え数多くの祭りや行事で鹿子躍を披露
- 2024年(令和6年)  
石川県・金沢ナイトミュージアム2024で鹿子躍を披露



現在の練習風景。戸倉公民館にて(写真提供:行山流水戸辺鹿子躍保存会)



2012年8月28日テキサス・レンジャーズ・アーリントン球場にて(写真提供:行山流水戸辺鹿子躍保存会)



お盆の時期に踊られる「墓踊り」。墓踊りは供養の意味をより一層込め踊るため、座位で静かに荘厳な雰囲気を持ち踊る。(写真提供:行山流水戸辺鹿子躍保存会)

# “乾物”でフェーズフリーを体験してみよう

## いつも

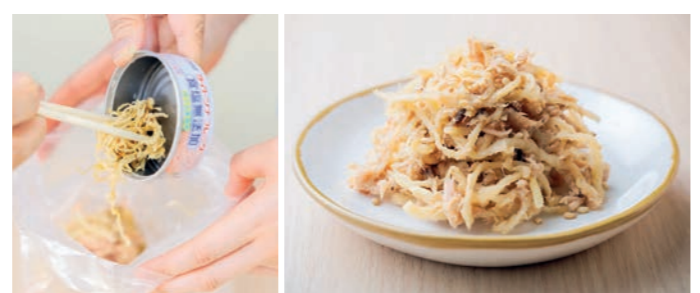
- 常温で長期保存ができ、保管スペースを取らない
- 食材の形が悪くても干すことで気にならず、フードロスにならない
- 皮をむいたり切ったりする手間が不要で、生ゴミも出ない
- 食材のバリエーションが豊富
- 軽量のため、輸送時のCO2削減になり、環境に優しい

## もしも

- 常温保存できるので、電気がなくても保管できる
- 軽いので、力のない方も持ち運びが楽
- 食材のバリエーションが豊富なので、災害時でもさまざまな料理ができる
- 干すことで水分が抜けて旨味が凝縮され、災害時でも栄養価の高い食事がとれる
- 生ゴミが出ないため、避難所の衛生環境に優しい
- 基本的に添加物が不使用なので、食物アレルギーの方も安心
- 水分があれば戻すことができ、野菜の乾物はそのまま食べることも可能(干しシイタケは加熱必須)

### ツナ缶の水分で戻す 切り干し大根とツナ缶の 梅風味あえ

- 【材料】
- 切り干し大根……15g(長いものはハサミなどでカットしておく)
  - ツナ缶(ノンオイル・食塩不使用)……1缶(70g)
  - 塩昆布……2g
  - 梅干し……1個(種は取り除く)
  - 白いうごま……適量



- 【作り方】
- ポリ袋にごま以外の材料を入れる。ツナは汁ごと加え、缶や蓋に残った汁も切り干し大根に吸わせる。(写真左)
  - 材料がまんべんなく混ざるように、袋の上からもむ(切り干し大根に水分が行き渡るように)。
  - 約15分置き、切り干し大根がしっかり戻ったら完成。器に盛り、白いうごまを振る。(写真右)

### ボトル紅茶なら火も不要 紅茶で戻した油麩スイーツ

- 【材料】
- 油麩(3mm程度の輪切りタイプ)……2~4個
  - 濃いめの紅茶……100ml
  - 砂糖……25g
  - レモン汁……小さじ1/2
  - ※大人の場合はお好みでラム酒……小さじ1/2
  - トッピング用のバニラアイス、ナッツ、ドライフルーツ、ジャムなど……適量



- 【作り方】
- 器に紅茶と砂糖、レモン汁を入れ、油麩を浸す。温かい紅茶を使う場合は、粗熱をとってから冷蔵庫へ。(写真左)
  - 油麩が冷えたら取り出し、ジャムやナッツ、ドライフルーツなどをのせて出来上がり。(写真右)

## POINT!

◎日常に取り入れて非常時の使い方をイメージ  
非常時に「乾物はあるけど、どう調理すれば」と悩まないよう、普段から使って馴染んでおきましょう。

◎時短&ラク家事食材として活用できる  
水で戻している間に、他の調理や家事ができるので、乾物を取り入れることで時間を有効活用できます。



火を使わずに、自宅にあるものだけでこんなにおいしいものを作るなんて、乾物ってすごいですね！  
自分でもいろいろ試して、お気に入りの乾物を見つけたいです。

レシピ出典: DRY and PEACE  
(わしん倶楽部 でアレンジを加えています)

# machico防災部といっしょ

## 今回のテーマ 日頃の備えって どうしたらいいの

machico会員  
(40代女性)



体験してみた人 /  
machico防災部員  
ぶりばん

災害の備えとして今注目されている「フェーズフリー」という考え方。それは、「いつも」と「もしも」を区分せず、日常使っているモノを工夫して非常時にも活用する防災対策です。今回は、vol.7で紙のスプーンや新聞紙スリッパの作り方を教えてくださった「わしん倶楽部」の田中勢子さんに、緊急時における日用品の活用術や、ラク家事食材としても重宝するフェーズフリーな乾物レシピを教わりました。



教えてくれた人 /  
わしん倶楽部 代表  
防災教育コーディネーター  
田中勢子さん

「フェーズフリー」は「備えない防災」とも言われています。ね、machicoでアンケートをとったところ、その言葉自体を聞いたことがない方も多いようです。どういった考え方なんでしょうか。

田中さん(以下田)「防災グッズは、平常時に順番がなく災害時に使うものという認識が一般的ですよ。でも、そうすると、準備にお金と時間がかかり、何をどこまで揃えるべきかも悩んでしまいます。フェーズフリーとは、日常のものを有事でも使えるように日頃から考えておこうというものです。

「最近フェーズフリー認証商品も見かけますが、家にある日用品も防災グッズになるのですね。」

田「私たちの活動は、先人の知恵を生かして楽しく防災をする「いつもしもまねっこ防災」がテーマ。新聞紙でスリッパを作ったり、風呂敷をリュックにしたり。アイデアを練るのも楽しいですよ。」

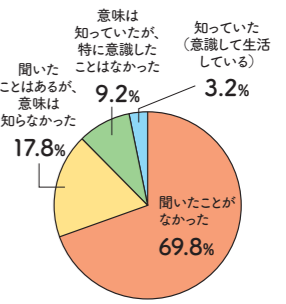
「フェーズフリーになじみがない方は、何を意識して備えるといいですか。」

田「家族構成やライフスタイルでも変わりますが、災害時に我慢できることできないことがありません。例えば、食料品は支援物資が届くまで多少の我慢はできますが、トイレは我慢できません。東日本大震災の経験や災害のニュースなどから、自分にとっての優先順位を考えてみてください。実は、避難中に野菜が食べたいという方が多いんですよ。そんなときは乾物がおすすです。」

「乾物ですか？常備している家庭も多そうですね。」

田「乾物は水分が抜けているので保存が利き、水がなくても豆腐やヨーグルトの水分で戻せます。乾物にするとカサが減るので保管場所も取りまのりも少なく、ラク家事食材として取り入れやすいんです。普段のレパートリーに加えて、いざというときに役立ててほしいですね。」

### 「フェーズフリー」という言葉を知っていますか？



せんだいタウン情報machico調べ (370件回答)

### WHAT'S

#### machico防災部とは

仙台・宮城の人とまちを元気にする地域コミュニティサイト「せんだいタウン情報machico」の編集部員が、防災・減災に役立つスキルを体験して発信する「部活動」です。

machicoからアーカイブが見られます！





## 耐熱ポリ袋

耐熱温度がマイナス30℃～120℃と幅広い耐熱ポリ袋は、冷凍も温めもOKで、電子レンジや湯煎調理に対応できる優れもの。最近では「ポリ袋クッキング」などとも呼ばれるほど、調理の時短アイテムとしても話題です。



いつも

- 食品の冷蔵・冷凍保存
- 食品や小物の収納
- 料理の下ごしらえ
- 電子レンジを使った温め
- 湯煎調理

もしも

- 食器にかぶせて洗い物を削減
- 湯煎調理に(少量の水で炊飯も)
- 簡易手袋に
- ケガや熱、暑い日の水のうに

## ご近所付き合い

モノだけでなく、日ごろの行いや心構えもフェーズフリーにつながります。例えば、近所の人と普段からコミュニケーションを取っておくことで、災害時の炊き出しや避難所生活などがスムーズに。地域に要介助者や外国の方がいたら、必要なサポートも考えておきましょう。



いつも

- 防犯対策
- 孤独感の解消
- 子ども同士の交流
- ご近所トラブルの予防
- おすそわけ

もしも

- 避難所運営のスムーズ化
- 安否確認ができる
- 避難する際の声かけ
- 災害時の救助、救出
- 情報交換

## 身近なフェーズフリーを考えてみよう

自宅にあるアイテムを選んで、「いつも」と「もしも」の使い方を考えながら書き出してみよう。

アイテム

- (例) タオル
- 
- 
- 

いつも

- (例) 体を拭く
- 
- 
- 

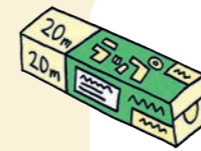
もしも

- (例) 体に巻いて包帯代わりに
- 
- 
- 

## ラク家事が防災に!

# フェーズフリーを実践してみよう

何気なく使っている日用品も、実は立派なフェーズフリーアイテム。「いつも」と「もしも」の使い方について、一例をご紹介します。



## 食品用ラップ

丈夫で密着力のあるラップは非常時に大活躍。包んだり巻いたりするだけでなく、紐状にねじった3本を三つ編みにすれば物干し紐にも。



いつも

- 食品の保存、乾燥対策
- 食品の冷凍
- 電子レンジでの温め
- 丸めて食器の予洗いに

もしも

- 食器にかぶせて洗い物を削減
- くしゃくしゃに丸めてスポンジに
- 傷口を洗ってから巻き付けて包帯に
- お腹に巻き防寒対策に



## ゴミ袋・ポリ袋

100円ショップなどで買えるレジ袋も、サイズ違いで揃えると便利。両サイドをカットしキッチンペーパーやペットシーツを重ねれば、簡易のおむつになります。また、チャック付きのポリ袋を活用すれば少量の水で洗濯が可能。



いつも

- ゴミの収納
- 食品や小物の梱包・保存
- 料理の下ごしらえ

もしも

- 切り込みを入れて雨具や防寒具に
- 懐中電灯にかぶせてランタンに
- 風呂敷リュックに入れて給水タンクに

じぶんとワーク

フェーズフリーとは、「もしも」のための「いつも」の備え。普段使っている身の回りのものが、アイデア次第で防災グッズに変身します。どの家庭にもあるもの、応用範囲が広いもの、備えておいてほしいことを、フェーズフリーの視点でご紹介します。

レクチャー/わしん倶楽部 田中勢子さん

施設 1 キーワード □津波被害を知る □証言を聞く □避難を考える □復興を感じる

# 担い手紹介 @みやぎ東日本大震災津波伝承館

ボランティア解説員

西城遥斗さん(右)  
(17歳・高校2年生) 富谷市  
菊田あかりさん(左)  
(17歳・高校2年生) 名取市

in <石巻市 仙台市>

# まきと みと

菊田さんは名取市から、西城さんは富谷市からこの場所に足を運び、毎月1、2度の活動に従事。館内に展示されたパネルの情報をわかりやすく解説し、震災の教訓と防災を伝えている

若い私たちだからこそ伝えられることがある

石巻南浜津波復興祈念公園内にある『みやぎ東日本大震災津波伝承館』。東日本震災の記憶と教訓を伝え継ぐための場所です。ここでボランティア解説員を務めているのが、菊田あかりさんと西城遥斗さん。共に17歳の二人は、震災の記憶に触れようと国内外から多くの人が足を運ぶこの場所で展示解説の活動を行っています。

震災発生当時はまだ幼かった二人。そのため、「被害に遭った人も訪れるこの場所で、本当に聞き手の気持ちに寄り添えるのか」「自分の言葉で震災の教訓を伝えることができるのか」と思い悩むことがあるといいます。しかし口を揃えて話すのは、解説に自身の経験を加えたり、具体的な数字を取り入れたわかりやすい説明を心掛けたりすることで、震災の記憶と自身の思いを届けたいということ。菊田さんは「私は被災者の皆さんのような深い悲しみを抱えていないかもしれませんが、だけ



中高生解説員一号として活躍する菊田さん。名取・関上出身の祖母から震災当時の話を聞いたことで、初めて震災を自分ごととして捉えられるようになったという

ど、私もきちんと震災に関わりたいし伝えたい。解説員としてその思いを示すことが大事だと思っています」と心の内を語ります。

「来館した方から『解説がわかりやすくして勉強になったよ』『話し方が上手だね』と反応をいただくと、解説員をやっているとよかったと思います」と話すのは西城さん。菊田さんもこの活動のやりがいを感じ、「来館した方が聞かせることができる体験から学びを得て、相互に影響を与えられること」だと語ります。二人はそうした手応えを感じる中で、震災伝承の後継者不足という課題と向き合うことも忘れません。西城さんは「東日本大



DATA みやぎ東日本大震災津波伝承館 ●宮城県石巻市南浜町2-1-56 <https://www.pref.miyagi.jp/site/denshokan/index.html>

震災から得た教訓に無駄なことはありません。だから未来の命を守るためにも、私たちのような世代ができるだけ長く伝え続けなければいけないと感じています。若い人たちがどうしたら震災を伝承していけるのか。今、その方法を模索している最中です」と、次のステップも見据えています。



西城さんは防災士と宮城県防災指導員の有資格者。防災の大切さを伝える活動にも興味を持ち、高校1年生の時にボランティア解説員に応募した



vol.09

# 砂の彫刻家・保坂俊彦さんの サンドアート

国内・海外を問わず  
注目を集める砂の芸術

地域おこし協力隊として東松島市に移住し、サンドアートを通して交流の輪を広げる砂の彫刻家、保坂俊彦さん。第一回東松島夏祭りの砂像製作中にお話を伺いました。

「タイトルは『松韻』。松に吹く風の音、の意味です。砂は大郷町の山砂。固めたら上部から木箱を外して削り、できた部分からコーティングします。強い雨でも耐えられるくらい丈夫なんですよ」

サンドアートとの出会いは1997年、東京藝術大学美術学部彫刻科に在学中の時。「秋田県八竜町(現・三種町)在住の叔父に『小遣いやらから作り来い』と夏休みに連絡をもらい、町で開催するサンドアートのイベントに軽い気持ちで参加しました。それ



現地で作り時間を要するサンドアート。完成前から制作を見守る方や雨風を心配する方など多くの人が訪れ、地域の交流が生まれる。

までサンドアートは全く知らなかったです。当時はインターネットが今ほど普及しておらず情報も少なく、自分で工夫しながら作りました。それから一年に一度、秋田で作っているうちに制作依頼が来るようになり、気づいたら職業になっていた感じです」

新たな役割を感じて  
地域おこし協力隊へ

保坂さんと東松島市との縁が生まれたのは2018年。「市内の月浜で慰霊の像を作

それから28年、世界チャンピオンに輝くなど数々の実績を残しています。

ってほしいと依頼を受けたのが始まりで、その時が東日本大震災の被災地で慰霊のためになる初めての経験でした。伊達政宗公の砂像を制作。他の場所での感想と違い、「ここに作ってくれてありがとう」と御礼の言葉をたくさんいただいたのが印象的でした」

震災以来、海に足を運べなかったという方からの「どうしてもサンドアートが見たくてあの日以来初めて海に来ることができた」という声が市役所に届いたそうです。

「正直ショックを受けました。この時、自分の砂像にこれまでとは違う新しい役割があるのかなと感じたんです。役に立っているのであれば、という想いが生まれました」

その翌年から毎年、東松島市の『キボツチャ』で砂像の慰霊碑を作ることになった保坂さん。大きな転機が訪れます。「3月11日頃の食事会の席で、地域おこし協力隊っていうのがあるんだけど、どう?」というお話をいただいて4月1日に移住しました。秋田県出身ですが3歳から東京暮らし、特に移住を意識したこと



日本全国、海外で活躍中の砂の彫刻家であり、東松島市在住・地域おこし協力隊の保坂俊彦さん。「県内各地で海開きが見られる昨今、依頼があれば仙台市でも政宗公の砂像を作りたいです」

もなかったけれども、話を聞いた時点で自分の中で答えは決まっていた感じでした。とても住みやすいですし、もう東京に戻る気はないですね」

2021年に加入した地域おこし協力隊は、コロナ禍を考慮してその年の入隊に限り、一年延長になりました。

「私は現在も協力隊の一員です。今は子どもたちにサンドアートを教えたりもしています。全国各地、海外からでも依頼があれば東松島市の許可を得て砂像制作に向かいますし、東松島市で『サンドアートジャパンカップ』という全国大会を企画しています。地元の子どもたちが将来、故郷の話をする時に誇れる一つになればいいですね。東松島といえばブルーインパルスとサンドアートだよ、みたいになつたら嬉しいですよ」

震災発生からの歩みを伝える常設展と様々な企画展示で構成された展示室。  
仙台市東部の文化や暮らしについてまとめた冊子も閲覧できる



施設②

キ-7-ド ▶ 津波被害を知る 証言を聞く  
復興を感じる アートを見る

# せんだい3.11メモリアル交流館



スライドの展示や震災関連書籍を通じ、地域の情報を発信する交流スペース。見学者への解説も行われている(要予約)

**問** ここは震災伝承に加えて、どんなことを目的に建てられた場所でしょうか。実際に足を運んで感じたことを書き出してみよう。

**答** ここは震災伝承に加えて、どんなことを目的に建てられた場所でしょうか。実際に足を運んで感じたことを書き出してみよう。



交流スペースの壁にディスプレイされた、仙台市東部を中心とした立体地図。広大な仙台平野と津波浸水区域との関連性を理解できる



仙台市在住のイラストレーター・佐藤ジュンコ氏が来館者の沿岸部の思い出を描きあげていく、更新型イラストマップも展示

**DATA** ◎宮城県仙台市若林区荒井字杏形85-4 地下鉄東西線荒井駅内 ☎022-390-9022 ●10:00~17:00 毎週月曜日(祝日の場合は翌平日)、祝日の翌日(土・日曜、祝日を除く)、年末年始、臨時休館日 ▶入館料無料 ▶<https://sendai311-memorial.jp/>



## 人と人が交わる駅の中で 交流を通じて震災の記憶を紡ぐ

仙台市東部沿岸地域への玄関口・地下鉄東西線荒井駅構内にある震災伝承施設。人々との交流を通じて東日本大震災の記憶、経験、教訓を紡いでいます。1階にある交流スペースの壁一面には仙台市沿岸部から山間部にかけての立体地図を展示。津波被害が大きかった地形の特徴を実感することができます。また、2階の展示室では震災発生からの出来事を時系列にまとめた写真で視覚的に震災を伝えていきます。大切にしているのは、人々が集い、交流できる場所であること。世代を超えて地域の人々に寄り添い続けることも忘れません。



施設②

キ-7-ド ▶ 津波被害を知る 証言を聞く 避難を考える 復興を感じる まちを感じる

震災当時、1年生の教室だった場所。歪んだ壁や黒板、剥がれた天井の様子から、津波の威力が伝わってくる

# 震災遺構 仙台市立荒浜小学校

4階展示室「3.11荒浜の記憶」では、2本の映像を上映。この場所で被災した人々の声が、当時の写真などとともにインタビュー形式でまとめられている

**震災の痕跡を鮮明に残しながら 荒浜の暮らしを伝え継ぐ場所**

東日本大震災で被災した仙台市立荒浜小学校の校舎を震災遺構として保存。津波の威力で折れ曲がったペランダの手すりや倒壊したコンクリート壁、津波の到達跡といった被災の痕跡を公開しているだけでなく、荒浜地区の歴史や文化、災害への備えも学ぶことができます。震災発生時から救助に至るまでの経緯を被災者自身の声でまとめ、映像展示として上映しているのも特徴です。

また、かつてこの荒浜地区に多くの人々の暮らしがあったことや、失われた日常に思いを馳せることができる場所にもなっています。



**問** 荒浜地区に住んでいた人々にとって、今、ここはどんな意味を持つ場所になっているのでしょうか。現地を感じたことを書き出してみよう。

**答** 荒浜地区に住んでいた人々にとって、今、ここはどんな意味を持つ場所になっているのでしょうか。現地を感じたことを書き出してみよう。



校舎4階で展示されている「明日への備え」。アニメーションやイラストを交えたわかりやすい内容で、災害への備えと発生時の対応を学ぶことができる



**DATA** ◎宮城県仙台市若林区荒浜字新堀端32-1 ☎022-355-8517 ●9:30~16:00(7・8月は9:30~17:00) 毎週月曜日・第4木曜日(祝日を除く)、年末年始(12月29日~1月4日) ▶入館料無料 ▶<https://arahama.sendai311-memorial.jp/>



神戸大学の学生が、荒浜地区に住んでいた住民とともに制作した模型を展示。家やスポットの一つひとつに思い出のコメントが加えられている

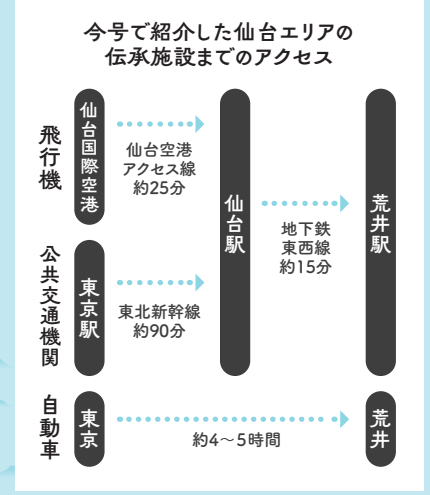


現在はスポーツ施設などが新設され、人々の交流が増えてきた荒浜地区。深沼海水浴場の近くには「震災遺構仙台市荒浜地区住宅基礎」もある



# きてみてマップ

きてみてで紹介した施設のほか、  
特集・あしたのクリエイティブで紹介した場所も  
記載しています。



## 1 JRフルーツパーク 仙台あらはま



季節の果物や野菜を生産しているほか、1年を通して摘み取り体験ができる、体験型観光農園です。カフェ・レストランや直売所等も併設しており、食の楽しさを満喫できる施設です。

**DATA** ◎宮城県仙台市若林区荒井新2丁目17-1 ☎022-390-0770 🕒5:00~16:00 🔥火曜日(祝日の場合翌平日)、年末年始 🌐https://stbl-fruit-farm.jp/arahama/

## 2 アクアイグニス仙台



震災で被害を受けた藤塚地区に、再び人々が集える空間を作るために誕生しました。天然温泉のリラゼーション、有名シェフが監修するこだわりの食、カフェ、名産品のセレクトショップや各種イベントなどを楽しめる複合リゾートです。

**DATA** ◎宮城県仙台市若林区藤塚字松の西33-3 ☎ご予約は各店舗までお問い合わせください。🕒店舗により異なる🔥不不休 🌐https://aquaignis-sendai.jp/

## 3 海岸公園冒険広場



大型遊具広場のほか、デイキャンプ場、冒険あそび場(プレーパーク)など、自然の中で子どもから大人まで楽しめます。定期的に行われる防災訓練も参加可能で、震災について知り、学ぶことができる公園です。

**DATA** ◎宮城県仙台市若林区井土字開発139-1 ☎022-289-6232 🕒9:00~17:00 🔥火曜日(休日の場合は翌平日)、年末年始 🌐https://bouken-asobiba-net.com/bouhiro/

立ち寄りスポット



宮城の復興の「いま」を  
SNSでお伝えしています！  
皆さまからの投稿も  
お待ちしております！



LINE



Facebook



X (Twitter)



Instagram

